

一 少年の終戦顛末と人生

富山県 堀口 尚

はじめに

私は昭和七（一九三二）年三月二日、北海道上滝村の国鉄官舎で徳島県出身の父利秋と、福井県大野出身の母いさの次男として生まれた。そして今日、七十一歳の誕生日にこの手記を書き始めている。思えば、長い人生の旅路であり、また一瞬間の幻の夢のようでもある。

一 戦争の中で育った幼少期

私の生まれる前年に「柳条溝事件」が起こり、誕生日の前日に「満州国」が建国され、五月十五日に五・一五事件が発生し、犬養毅首相が暗殺されて、日本は一路軍国主義の道突き進んだ。昭和十二年七月七日の「盧溝橋事件」を機に戦線は中国大陸全土に拡大、そして十二月南京は陥落した。私がまだ五歳の時だったが、「日本勝った！

日本勝った！ 支那負けた！」と、日の丸の小旗を振って行列行進をしたのを覚えている。

父が中湧別駅に転勤した。私が小学校二年生の時、父は当時、飛ぶ鳥も落とす勢いで成長していた南満州鉄道（株）に転職して単身赴任となり、家族五人（母、兄昭夫、双子の妹貞子・節子と私）は叔父の住む旭川市に移った。後日聞いた話だが、父は前職で線路の切り替え作業を誤る事故を起こし、昇進が遅れていくことに嫌気が差したが、満鉄への転職の動機になったようだ。

当時、朝鮮の清津までが満鉄所管であり、父の最初の勤務地は朝鮮の清津駅で、その後、羅津の列車区に転勤した。頑固で無口で怖い父親が不在の旭川市での一年間の生活は、母にとっても、また、私や兄妹にとっても「開放」と「自由」を味わった貴重な時間だった。後日、皆でそのころのことを語り、笑い合ったものだった。中湧別に住んでいたころは、父は尺八に凝っていて、帰宅してお腹を空かして待っている子供たちを尻目に、

夕食前に練習をしていたものだった。「お腹空いたよ！早くご飯頂戴！」と騒ぐと、尺八のごつごつした所でごっん！と頭をたたかれた。悪さするのも次男坊、叩かれるのも次男坊だった。父親の次に偉かったのが優等生の長男で、父親からも大事にされていたが、やんちゃな次男坊は洋服も学用品も全部兄貴からのお下がり品で、何一つ買ってもらえない。そんな私を母親が何かとかばってくれた。

昭和十五年、兄が中学二年、私が小学三年の秋、一家は新潟港からサイベリヤ丸で朝鮮の羅津に渡った。翌年小学校は国民学校となり、大東亜戦争が勃発した。このころから物資がどんどん不足していき、食糧・衣類・日用品が配給制になり、小国民にも「欲しがりません、勝つまでは」が要求され始めた。月に一度、僅かな砂糖が配給されると、母は「せめて月に一度だけでも、たっぷり甘いものを食べよう」と言って、雑穀入りのご飯に、配給された砂糖を全部かけて食べさせてくれ

た。

雲雀ヶ丘社宅で生まれた末の妹君子を含め、七人家族となり、一家の空腹を満たすために、母は小さな空き地を畑にして野菜作りに懸命だった。そんな生活を送っていたさなか、小学五年生のとき、わたしは肺浸潤を患い、羅津満鉄病院に四カ月間も入院する羽目になってしまった。危機を脱して移った大部屋は、満鉄の青年社員と同室で、来る日も来る日も彼らの歌う流行歌を聞かされて、退院するころはそれを全部覚えてしまった。退院しても勉強はさっぱり手につかず、淡谷のり子や東海林太郎、藤山一郎、季香蘭や高峰三枝子などの愛だ、恋だの歌を歌っていたものだから、「子供がそんな歌を歌う奴がいるか！」と父によく怒鳴られた。

やがて、厄介な問題が起きた。落第の話が持ち上がってきたのだ。「堀口は早生まれだし、将来を考えたならこの際留年したほうが良いだろう」というわけだ。やんちゃ坊主の私はストライキで抵抗

して、何とか落第は免れたが、今度は進学問題が浮上してきた。長男は大学進学、次男は高等科二年を卒業したら早く仕事につけということ、父親の進学方針は明確だった。当時の日本では旧制中学進学はエリートコースで、現在の大学進学より少数だった。しかし、朝鮮や満州などの外地では、現地の人たちより優位にたつ日本人子弟のほとんどが、進学コースに進んだ。悶々としていた時に、担任の藤木先生が、清津師範を受験してみても、と勧めてくれた。朝鮮人の受験者が多く、日本人が優先採用される比率が高いし、官立だから授業料は不要で、毎月手当も支給されるという話に、父も「受けるだけ受けてみる」と承諾した。合格通知を受け取った時は、天にも昇る思いだった。中国の戦線は泥沼に入り、米英との無謀な戦争が終焉に向かっていることも知らずに、わたしは喜び勇んで家を離れた。

朝鮮官立清津師範学校の教育と寄宿舎の生活は、軍隊生活とあまり変わらないものだった。退役陸

軍中將の重松校長は小柄ながら威風堂々、皇居遥拝後の朝礼訓示では「畏くも天皇陛下におかせられては」の言葉を連発して、その度に直立不動の姿勢をとらされた。「敬礼の仕方が悪い」と言われては、上級生から殴られた。配属将校がサーベルをがちやつかせて校舎を闊歩して、軍事教練で生徒をしごいた。育ち盛りの寄宿生たちは腹が減って勉強どころではなく、馬小屋で馬の豆粕を盗んで食べたり、夜中に炊事場に食べ物を盗みに入る者が後を絶たなかった。

野球は敵性スポーツとして禁止され、カタカナ語も敵性語として禁止された。英語の時間には、教師が「これからは日本語が国際語になるんだから英語はそこそこでいいぞ」と言う始末だった。

敗戦間近の四月、二年生になってまもなく私にとって忘れられない事件が起こった。軍事教練の最中に、「堀口、すぐ校長室にこい」と呼び出しがかかった。何事かと恐る恐る校長室に入ると、校長の隣に憲兵が座っていた。校長曰く「これは君

の書いた手紙だね。ここに書いてある歌を私の前で歌って見たまえ」。その手紙は私が羅津中学の友達に送ったもので、手紙には「最近俺たちの学校ではこんな歌が流行っている」と次のような歌の

文句が書かれていた。「朝のはよから弁当箱提げて、学校通いはつらいもの。学校通いは監獄通い、足に鎖がないばかり。校舎焼け焼け寄宿舎ぶっこわせ。校長コレラで死んでしまえ。校長死んだとて誰泣くものか。山のカラスが鳴くばかり。山のカラスもただでは鳴かぬ、墓の団子が食いたさに」こんな歌を校長本人の前で歌えるはずがない。私は震えあがって黙って下を向いていると、「父親に連絡して貴様はすぐに退学だ」と校長が怒りを爆発させた。憲兵が、おもむろにカバンから手錠を取り出してがちゃつかせながら、「貴様が誰からこの歌を習ったかを正直に言えば、今回だけは許してやる」と凄んだ。私は苦し紛れに、朝鮮人で五年生のM室長の名前を挙げてその場を許してもらった。M室長は即刻憲兵隊に連行され、翌日

帰って来たときは顔が紫色に腫れ上がり、歯が折れて物も言えない状態だった。この話は瞬く間に学校中に広がり、気まずくてM室長とは同室でなくなってしまうた。

担任の小林先生の配慮で私は寄宿舎を出て、父が単身赴任の時に下宿していた旧清津駅近くの下宿屋にお世話になることになった。下宿のおぼさんとはとてもいい人で、寄宿舎生活からみれば天国のようだった。事件は思想的背景がないと判断され、収まっていったが、当時は私たち生徒の手紙まで検閲されていたのだった。

二 ソ連の参戦と捕虜、難民收容所

八月九日の朝、私たちは荷物を背負って東洋紡清津工場に向かっていた。学徒動員令による勤労奉仕である。突然、羅津方面から聞き慣れない爆音が聞こえてきた。見上げると数機の編隊機が飛んでくる。「おい凄いな。日本軍の飛行機だ。しかし、こんな飛行機見たことないなあ」仲良し三人組の小森と五十嵐とで空を見上げて腰を下ろして

一服した途端に、編隊機は次々に急降下して、ぱらぱらと爆弾を落とし、ばりばりと機銃掃射を始めた。

必死の思いで駆け込んだ紡績工場は、てんやわんやで作業どころではなかった。八月十一日になって学校側からソ連の参戦と工場の操業停止について説明があり、「これをもって一時解散とする。各自、家族のもとに帰り、その後の連絡を待て」ということになった。何のことはない、学校は無責任にも我々生徒を戦乱の巷に放り出したのである。

例の三人組で東に向かって歩き出してはみたものの、羅津は清津より先にやられているだろうし、だいいち、歩いて行けるはずもない。「学校に行ってみよう。誰かいるかも」と、学校へ向かった。夕闇がせまっていた。校舎には猫の子一匹いなかった。校庭には重松校長の黒塗りの乗用車が、主人に見捨てられてぼつんと取り残されていた。我々はへとへとになり、車の中で一夜を過ごすこ

とにした。銃砲撃、艦砲射撃の音が響き、空は赤く染まっていた。

夜が白々と明けてきた。「街に様子を見に行かないか。何か食べ物を探さないと」と私が言っても、小森も五十嵐も動こうとしない。私は二人にここで待っているように言って、一人で街に向かった。これが、彼らとの最後の別れになるとは知る由もなかった。

清津の街は方々に火の手が上がり、燃え尽きた家の黒焦げの柱がブスブスと煙を上げ、道路には電柱が倒れて、電線が道を阻んでいた。時折、銃声がある。もうすぐ下宿屋だ。ひよっとすると食糧があるかもしれない。その時、前方からこちらに向かって身をかがめて進んでくる部隊が見えた。とっさに日本軍だと思い、大きく手を振った。どんどん近づいてくるが、何かがおかしい。いやに体が大きいし、鉄兜の形が違う。「あっ、ソ連兵だ」と私は啞然として、立ちすくんでしまった。仁王様のようなソ連兵に銃の台尻でこづかれて、隊長

の前に立たされて、身体検査をされた。彼らは海軍陸戦隊だった。部隊は小休憩に入り、朝食が始まった。一人の兵士が黒い大きなパンをこちらに持つて来て、手まねで食べろと言う。「毒殺する気かもしれない」と思い、私は手を出さなかった。兵士はやにわにパンをちぎると、わたしの口にねじ込んだ。甘酸っぱい味が口いっぱいに広がった。私はぺっ、と吐き出した。仁王様たちはグラグラと笑った。

隊長が何かを指示すると、自動小銃を持った兵士が、私の肩を鷲掴みにしてぐいぐいと引張った。「いよいよきた。銃殺だ」と、目の前がボーと霞んだ。両親、兄妹達、小森、五十嵐、重松校長、そして憲兵の顔が、頭の中でぐるぐる回った。「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪過の汚名を残すことなかれ」と戦陣訓には書かれてあるが、「撃たれたらどんなに痛いか。ああ、死にたくない」と考えていると、隊長の大きな声に、はっと我に返った。さっきの兵士が横に立ち、隊長がしゃが

んで、パチリとカメラのシャッターをきった。私はへなへなと座り込んでしまった。ソ連兵たちが、またグラグラと笑った。

民間服を着た朝鮮人が、隊長と何か話し合った後、私に近づいてきて、「隊長に君が中学生で子供だと話したら、釈放すると言っている。どこへでも好きな所に行きなさい」と言った。隊長の顔を見ると、手で「行け、行け」と合図する。私は少しづつ後ずさりしたが、何事も起こらなかった。くるりと前を向いてだんだんと足を早め、それから全力で走った。助かったのだ。

市街地を抜けて郊外に出て、草むらに転がっていた自転車に飛び乗って、必死にペダルを踏んで走ると、向こうから土煙を上げて大型トラックが疾走してくる。今度は日本軍だ。手をあげた瞬間、トラックは急停車して、助手席から隊長が降りてきた。事の次第を話すと、隊長の顔色が変わった。「君も早く乗れ」と言われ喜んで助手席に乗ると、トラックは猛スピードで走り出した。

山の裏側で野宿することになり、晩飯が始まった。餅栗の混じった白米の飯盒飯に牛肉の缶詰、そのうまかったこと。どんな山海の珍味も、あの時のうまさには勝る食べ物はない。考えてみれば一昼夜、水一滴飲んでいなかったのだ。「もし君に会わなかったら、我々は全滅していたかもしれない」と隊長は言った。私は満腹感と安心感と疲れとで、たちまちぐっすり寝込んでしまった。

このトラック隊は羅南師団境城輜重隊所属で、清津港近くの天馬山方面の前線に、食糧弾薬を輸送する途中で、隊長は佐藤正平さんという軍曹だった。

ここに、佐藤さんが後日『境城』（戦友会の自己史）に書かれた中から、私に関わる部分を抽出する。

「康徳付近まで後退してきた時、邦人の少年が一人で南下してくるのを見つけたので、尋ねてみると彼は堀口某といい、師範学校の二年生だが家族とはぐれてしまい、仕方なく一人で南下してい

るとのことだった。わたしが『君さえ良ければ、部隊について来い』と声をかけたら小躍りして喜び、その後、私達と行動を共にすることになった。

彼は小柄ではあるが色白の美少年で、その上利口で、私たちの仕事をよく手伝ってくれた。隊員の皆からも可愛がられ、『チョコマン』のニックネームをつけられていた。私たちはチョコマンを連れて、山砲隊兵舎に戻った。その直後、空襲警報と同時に敵機の猛烈な爆撃を食らった。屋根瓦は飛び、窓は壊れ、兵舎の赤煉瓦は崩れ落ちた。これではとても舎内にはいられないと思い、チョコマンを連れて蛸壺に避難した。その後も爆撃、機銃掃射が続けられた。チョコマンは敵機がくれば首を引っ込め、去れば首を出して敵機の動きを皆に知らせていた。兵舎を捨てた中隊は、射撃場に移動した。チョコマンは残念なことに、後日、古茂山捕虜収容所で自動車整備隊の結成に際し、棚内ラーゲルに残して来なければならなかった。彼は帰国できれば、旭川市で材木商を営んでいる叔父

の家に行くと言っていたが、無事に帰国してくればよいのだが」

『境城』編集者注記「縁とは本当に不思議なものです。佐藤正平氏の投稿の中に『チョコマン』氏のその後の消息を知りたい、と書いてありますが、『水虎会機関紙―防疫給水部隊員の会誌』を読んだ宮城県の鈴木源吉氏が、『この人が佐藤氏が尋ねている「チョコマン」氏ではないか』と連絡があった。佐藤氏は早速興奮のうちに電話で確認され、互いの無事を喜び合うことができました。そして、両氏は平成五年七月三日、新潟で四十八年ぶりに再会を果たされ、その模様がNHKのイブニングニュースで七月五日に放送されたことを追記します」。

流言蜚語だと否定されていた日本の無条件降伏が現実となり、八月十九日に武装解除が始まった。兵隊は小銃の菊の御紋を帯剣で削り取り、武器を全部横一列に並べた。私は預かっていた小型モー

ゼル拳銃と手榴弾を返上した。ソ連兵の「ダワイ、ダワイ」の声に追い立てられながら、羅南師団銃兵場から行軍が始まった。落伍しないように、前の兵隊さんと腰を紐で結び合い引つ張ってもらって、夜中もうとうと眠りながら歩くというつらい行軍だった。

午後から一晩中歩き通し、翌日の昼ごろ着いたところが古茂山捕虜収容所だった。ここで三カ月間捕虜生活を送り、夏服でのテント生活が限界となった初冬に、出発命令がでた。ソ連兵たちは「トキーヨー、ダモイ（東京へ帰る）」を連発した。収容所は、帰国の話でもちきりになったが、いよいよ出発することになり、古茂山駅で旧関東軍の防寒用の帽子、外套、靴が支給され、貨車にぎゅうぎゅう詰めにされて発車した。貨車は北へ向かった。

着いたところが中国吉林省延吉市（旧満州間島市）の二八捕虜収容所で、ここはシベリア送りの中継地であった。一縷いともの望みを絶たれて意気消沈

しているところへ、「軍人でないものは集まれ」と号令がかかり、十数人が集まった。「皆さんは非軍人なので、本日をもって釈放とする。ただちにトラックに乗ってください」と言われ、清津以来、生死を共にしてきた皆さんと別れの挨拶を交わすまもなく、収容所を後にした。トラックは、夜の帳に包まれた延吉市街を通り抜け、長い橋を渡って高い塀の前に止まって降ろされた。門柱には「間島省刑務所」の文字が刻まれていた。刑務所は敗戦で受刑者たちが全部逃げ出し、日本人難民の収容所になっていたのだ。ここは文字通りの生き地獄だった。

松谷みよ子先生の『民話の手帳』（一九八六年第二十九号）に掲載された私の小文を、ここでそのまま引用する。

「昭和二十年ごろの日本人難民収容所（延吉監獄）でのこと。ソ連と満州の国境の方から命からがら逃げてきた開拓団や青少年義勇軍の人たちは、零下二十度から三十度の冬に、着る物も食べる物

もなく、発疹チフスが大流行し、毎日毎日たくさんの人が死んでいった。死んだ人の着物を、生きている人が取って着た。丸裸の死体はすぐカチンカチンに凍った。大きな作業所は、何段にも積み上げられた冷凍人間の山になった。四十年経った今でも、冷凍の魚や肉を見ると、その時のことを必ず思い出す」。

広島と長崎が灼熱の地獄なら、ここは寒さと飢えと伝染病の地獄だった。

年の瀬も押し迫ったある日、私に好意を寄せてくれた朝鮮人の保安隊（警察）幹部が「ここにいたら君も死んでしまおうだろう。私が働き場所を世話するからついて来なさい」と言って、私を延吉橋ふもとの鏡城旅館に連れ出してくれた。三度の食事にありつけ、暖かいオンドル（床暖房）で寝られるなんて、本当に幸せ者だった。だが、その幸せはすぐに悲劇に変わった。

仕事を始めて三、四日も経たないうちに、私は高熱をだして意識不明に陥った。既に感染してい

た発疹チフスが発病したのだ。手厚い看病で私は一命をとりとめたが、病魔は次々と旅館の家族を襲い、お爺さんが亡くなるという最悪の事態になった。オモニ（お婆さん）は「わし達はやつと日本から解放されたというのに、日本人の疫病神に殺されるなんて」と、土饅頭の墓をたたいて号泣した。気のいい家族の態度は一変して、私にくらぐあたってくる日々が続いた。一日も早くこの呪われた場所を出なければならなかった。

ある日、満鉄で父と一緒に来たという人がこっそり尋ねて来て、「羅津満鉄の人たちはみんな撫順に避難しているそうだ。君の家族も多分一緒だ。準備ができたら迎えに来るから、一緒に行こう」と言っ、延吉駅近くの居場所と名前のメモを置いていった。ところが、待てど暮らせど迎えに来ない。痺れを切らして尋ねてみると、来ないはずで、その人も発疹チフスで死んでいたのだ。

ついに旅館を離れる時がやってきた。安図県は大甸子の土皇（私兵を持った地方の権力者）邸

スーウオン
書文団長がトラックで商売に来て投宿し、このトラックの運転手がこれまた佐藤さんという日本人だった。邳書文団長に頼んでもらい、私を連れ出してもらうことになったのだ。私はトラックの荷台に乗り、未知の山奥に向かった。三月とはいえ、風は刺すように冷たかったが、春はすぐそこまで来ていた。

暖かくなり、農作業で忙しくなると、私は作男よろしく畑仕事に駆り出され、老農夫から「小日本鬼」と呼ばれて、こき使われた。「もうすぐ毛沢東の八路軍がやって来て、地主や金持ちをやっつけて、貧農や作男に土地を分配するそうだ」という噂が広がり始め、邳書文の権力が揺らぎ始めた。何を血迷ったか、彼はそれまで用心棒として雇っていた旧関東軍の日本人武装集団十数人を、真夜中に一斉射撃で抹殺してしまった。

噂の八路軍一個連隊（中隊程度）が進駐してきた。邳書文団長は雲隠れしてしまい、「保安隊」は無抵抗で武装解除し、邳書文団長の家が連隊本部

となり、団長の家族は一室に軟禁されて、ドアには警備兵が立ったが、我々使用人は、出入り自由だった。連長は、この珍しい日本人少年に大変興味を示し、私がなぜこの奥深い山村の土皇のもとにいるのかを、根掘り葉掘り聞いてきた。ある日の夜、私は連長室に呼び出された。朝鮮人の幹部が通訳に入り、日本語と中国語、そして朝鮮語ごちゃ混ぜ、時には筆談で話が始まった。

延安で毛沢東と一緒に日本侵略軍と戦った岡野進（野坂参三）の話や、「帝国主義」「国際主義」「階級社会」「搾取」など、初めて聞く難しい話ばかりだったが、要するに山西省で連長の家族は皆、日本軍に殺されてしまった。息子が生きていたらちようど君ぐらいだ、君が息子のように思えてしようがない、ということだった。八路軍に参加して、新中国と民主日本建設のためにがんばってみたいか、ということだった。「今日はここまでだ。よく考えて、明日返事をくれ」そう言って、連長は、私の手をぎゅっと握った。

私は大きな衝撃を受け、頭は混乱していたが、煎餅布団に潜り込んだ。「八路軍になるということは、俺は中国人になることか。しかし、彼は俺を日本人といい、民主日本建設のためとも言っていた。それにこんな山奥にいつまでもいる訳にもいかない。それにしても俺は軍隊に縁があるなあ。ソ連軍、日本軍、捕虜収容所、そして今度は八路軍だ。馬には乗ってみよ、人には添うてみよ、と母ちゃんが言っていたじゃないか。よし、決めた」私は深い眠りに落ち込んでいった。十四歳の春だった。

三 東北民主連軍に参加して
連長の名前は何正福、私は何光明という中国名をもらって、何連長付き「小鬼」（八路軍少年兵の愛称）となった。

長く苦しい抗日戦争の後、中国の民衆が切望したのは、国の独立と統一、そして何よりも平和と生活の安定と向上だった。ところが蒋介石の国民党は、この民意に反して、アメリカの全面的バツ

クアツプのもとに、三度目の共産主義撲滅の内戦を大々に展開する。世界の「常識」は蒋介石の勝利を信じて疑わなかった。しかし、腐敗して人の心を失った国民党軍は次々に敗北し、中国共産党が勝利して、中華人民共和国の成立となるのだが、八路軍が中核となって編成された東北民主連軍も、私が入隊したころは、ゲリラ部隊から正規軍に成長する過渡期にあり、まだ大都市を制圧している国民党軍が圧倒的に強く見えた。何連長の部隊は、吉林軍区第二団に属する戦闘部隊で、各地を移動しながら隊員を教育訓練しつつ、農民の土地革命を支援して解放区を広め、来るべき決戦に備えていた。何連長は営長（連隊長）に昇進した。

龍井という街に駐屯していた時に、「日本人が帰国するために、駅に次々と集合している」という噂を耳にした。私はこの広大な大陸に一人取り残されている不安に駆られて、夕方こっそり部隊を抜け出して引揚者集団を尋ねたが、「知らない

者をかくまうと、後で責任を問われて大変なことになる」と、断られた。意気消沈して、すぐそこと部隊へ戻ると、何連長が待ちかまえていた。「光明、無断外出は違反だぞ。お前の気持ちは分かるが、俺たちは皆同志なんだ。悩み事は率直に話し合おうじゃないか。将来必ず祖国に帰れる時が来るさ。心配するな」と言われ、私は言葉もなく、はらはらと涙を流した。

解放軍は守勢から攻勢に転じ始め、戦闘訓練も厳しさが増し、何となく気ぜわしくなってきたある日、何連長が神妙な顔つきで私を呼んだ。「君も知っての通り近々、部隊は前線に出動する。今までと違い、大きな戦闘だ。死傷者が出るのは避けられない。君をそんな危険な目にさらすわけにはいかない。そこで、上級とも相談したんだが、君を軍区衛生部の衛生幹部養成所に派遣することにした。君の意見はどうかね。聞くところでは、講師は日本人の軍医だし、後方病院には日本人がたくさんいるそうだ」と言う。わたしは一も二もな

く了解した。衛生部には各部隊から選抜された二十数人が集まった。養成所に中国名の若い日本人がいることは、瞬く間に広まった。私は多くの日本人と日本語で話し合えるようになり、安心感と落ち着きを取り戻し、同僚に頼られるようになり、何となく存在感がでてきた。

そんなある日、軍区衛生部のボス、ズオウチイジ周吉安部長

から呼び出された。「ほう、君が噂の何光明同志か。ここにはたくさん日本人医療関係者がいるのは知っての通りだが、彼らが安心して働き、軍が必要とする部署に随時配属するのが、私の大事な仕事の一つだ。そのため、日本語がわかる適当な助手を探していたんだが、君ならびつたりだ。私の秘書として働いてもらえないかね」と言われ、かくして私は周部長の秘書兼通訳となった。ところが、この部長はとんでもない人物だった。気ままに、わがままに、すぐに人を罵倒する。洒落こきで贅沢三昧、それに許せなかったのは、日本人の美人看護婦を狙う女たらしだったことだ。私は、

だんだんとやる気をなくしていった。

衛生部が延吉市に移転してまもなく、衛生部に新しい政治委員（中国共産党の責任者）が赴任してきた。譚タン政文ズエンウオンというこの人物は、周部長より偉い幹部だというのに、身なりは質素、穏やかで、威張ったところが一つもない、わがまま殿様の周部長とは対照的だった。

報道で後から知ったことだが、譚氏は中国共産党の中央委員で、有名な大幹部だった。

国共内戦の中で、日本人に係わる重大事件が発生した。いわゆる「通化事件」である。この事件の後、日本人に対する目が厳しくなり、軍内の不必要な日本人は、どんどん解雇されていった。

ある日、私は、譚政治委員に呼び出された。「何光明同志、聞くところによると、最近の君は元気がなく、仕事にも身が入らないという話だが、どうしたのかね」と聞かれ、私はこの際だと思い「譚政治委員、私も他の日本人のように解雇してください」と切り出した。彼は私の気持ちを讀んでい

て、「自分から解雇してくれと言う奴がいるかね。君が辞めたくなる理由を率直に話してくれないかな」と言った。私は腹を決めて、周部長の悪行についての不満を全部吐き出した。彼は私の話をうんうんと聞き、こう言った。「よく話してくれた。これは陰口ではない。我々の仕事の改善のために必要なのだ。私がここに来たのもそのためなんだ。ところで君の次の部署だが、何か希望はあるかね」私は肩がおりた気持ちで、「衛生部と病院以外で、日本人がたくさん働いている所なら、どこでもいいです」と言うと、彼はしばらく考えて「私が省政府に紹介状を書くから、それを持って行ってくれ。必ず君を新しい部署に配置してくれるだろう。それでいいかね」と言った。即座に私は、「それで結構です。御配慮に感謝します」と言って、晴れ晴れとした気分になった。こうして東北民主連軍としての私の存在は終わった。十六歳の初春だった。後日、周部長は解任され、大幅に降格されたと聞く。

四 その後の中国での仕事と生活

吉林省人民政府の下に、吉林省日本人管理委員会（略称、日管委）という機関があり、私はそこに預けられることになった。構成員は全部日本人で、自主的に運営されていた。

秋になり解放軍は攻勢に転じて、大都市を次々に攻略、東北全土を解放、省都が吉林市に移転した後、私に新しい出番が廻ってきた。

それは吉林市に日本人子弟の寄宿制小中学校を建設することだった。建設責任者は小野清丸氏で、私はその助手兼通訳だった。内戦終結後の混乱と物不足、紙幣を袋で担いでも何ほどの物も買えない超インフレという大変な状況だったが、昭和二十四年春に吉林市天津路二十五号の地に、ようやく開校という運びとなった。名称は吉林市立日本人民主完全小学校（略称、日完小）で、完全とは六年制の意味であり、中学校は公認されていないが、自主的な併設運営が認められた。教育局からは経常費、人件費が支給されたが、人事と教

育内容については、一切日本人側に任されていた。

学校長は、高岡商業出身で新聞記者の経歴を持つ石田幸雄氏、日本での教員資格を持つ先生は、長野県で中学教師をやっていた陸軍中尉の気賀沢文巧氏ほか一、二人で、後は多種多様だった。最多時には約二十人の教職員と寄宿生百数十人が、同じ釜の飯を食い、苦楽を共にしたのである。小野さんは、建設が終わると日管委に戻った。

私は十代の若輩ながら、教導主任の名で校長を補佐した。私の人生にとって、この時期はたくさんの体験と勉強をさせていただいた最も充実した青春的一幕だった。ここで妻、寺田清子との出会いもあった。

彼女の父親は揮春炭鉱の幹部社員だったが、敗戦直後に病死して、継母や姉弟とも別れ別れになってしまった。そんな彼女を石田校長夫妻が親代わりになって面倒を見てくれたが、解放軍の軍事工場で働いていた彼女は、内戦の進展の中で移動して、遠く北安の地に行っていた。彼女の身

を案じた石田夫妻が手を打って、日管委職員に転職させ、呼び寄せたのが事の始まりだった。青春真っ盛りの二人は、磁石が引き合うように恋仲になっていった。

私達は結婚式の日取りを八月十五日と決めた。九死に一生を得た二人の幸せの日を、終戦記念日（中国人民にとっては光復記念日）と重ねることで、二度と再びあの悲惨な戦争を繰り返さない誓いの日とし、お盆と重ねることで、亡くなった無数の人々を偲ぼうとの思いからだった。以来、五十二回の結婚記念日を迎えようとしている。

結婚式は日完小の講堂で「盛大」に行われた。炊事のおじさんが豚肉のたくさん入った野菜炒めと白米のご飯をたくさん作ってくれた。講堂は何十人もの人でいっぱいになり、白酒を飲み、食べ、語り、歌い、そして踊った。新郎新婦の洗濯したての紺の木綿の人民服の胸には、真っ赤なバラの造花が晴れがましく咲いていた。私十九歳、妻二十歳の青春だった。

内戦が終わり、中華人民共和国の成立、そして朝鮮戦争と激動の数年が経過したが、日本政府は新中国を敵視し、台湾の蔣介石を支持していた。そんな中で、日中友好協会、平和連絡会、日本赤十字社の民間三団体の努力により、昭和二十八（一九五三）年に在華日本人の帰国事業が始まり、日完小は五年間の短い歴史の幕を閉じることになった。

生まれたばかりの長男、実を抱いた私たちは、残務整理を終えて、帰国するか残留するかについて悩んだが、官費で最高学府に留学できるといふ中国側の配慮に惹かれて、残留の道を選んだ。私は、上海の華東師範大学歴史系に研究生として入学し、ソ連の歴史学博士ポバリヤーエフ教授と、中国の林^{リン}^{ジン}岱^{タイ}教授に師事して、世界と中国の近現代史を専攻した。妻、清子には上海図書館の膨大な日本図書を整理する仕事が待っていた。上海での私たちの生活は、当時の中国の状況から贅沢はできなかつたが、2DKの宿舎が当てがわれ、上

海で生まれた長女、芳子と四人でつましくも穏やかで充実した日々を過ごした。

遂に、母国に帰る時がきた。天津港からの最後の引揚船「白山丸」で、昭和三十三年七月十五日、緑滴る舞鶴の土を踏んだ。

北朝鮮で戦乱の巷に放り出され、家族とはぐれた十三歳の少年は、二十六歳になり、妻と二人の子供を伴って十三年ぶりに室蘭市長をはじめ、多くの市民の歓迎の中、父母兄妹との再会を果たした。母はそれとなく私の右手をとって、人差し指と中指を見つめた。そこには、私が幼少のころに火鉢に手を突っ込んだ時の、火傷の傷跡がはっきり残っていた。母は、目の前にいる男が間違いない我が息子であることを確認して、嬉し涙を流した。敗戦時、五歳だった末の妹、君子は撫順の収容所で病死、その身代わりのように生まれた十三歳の末の弟、満夫と初対面することができた。十三年に亘る中国での青春ドラマは終わった。

五 帰国後のあゆみ

私たちが帰国したころの日本は、第二次岸内閣が成立、朝鮮戦争のおかげで経済は高度成長期に入り、テレビが普及し始め、地方の中卒の若者たちが金の卵として大都市に流れ出した時代だったが、「赤い中国大陸」から帰って来た浦島太郎を必要とする所はなかった。

室蘭の兄の家で悶々としていた時、日完小の石田校長から「富山に来ないか」と誘いがかかり、渡りに船と高岡市立野の大きな石田夫妻宅に一家四人が同居。当時まだ盛んだった映画事業の手伝いを始めたが、所詮、それは石田さんにおんぶしているに過ぎず、日本社会二年生の浦島太郎は「旅の人」（よそものという意味の富山弁）から富山の人間になり、自立しなければならなかった。

そんな私を理解した上で、雇ってくれる社長が現れた。北星ゴムの販売会社北一ゴム商事（株）の米屋芳夫社長は、旧満州で軍人として敗戦を迎え、シベリア抑留の体験を持つ人だった。ここで

の三年間のセールスマンとしての仕事と生活は、私にとって富山の社会に溶け込み、一人前の社会人となるための大事な学習期間だった。妻も内職をして必死に生活を支えてくれた。住まいも間借りから公営住宅に昇進した。私たち夫婦の前には、このままサラリーマンとして家族の安泰を求める道か、それとも自らの経験と信念に基づき、社会と人々が求める道に進むかを問われる立場になり、あまり悩むこともなく後者の道を選んだ。私は革新政党的専従役となり、妻も相前後して婦人団体の専従役に就いた。それは苦労多く報い少ない厳しい道だったが、私たちは働き盛りの時代をその道一筋に走り抜いた。

お陰様で妻、清子は推されて富山市議会議員を務めさせていただいたし、私も県知事選挙に立候補させていただくなど、貴重な体験を重ねることができた。

子供達も親の背中を見て育ってくれて、それぞれ成人した。

しかし、神仏は大変な意地悪をするものである。それは突然にやってきた。長男が二十六歳の時、結婚して愛児をもうけてまもなく自動車事故を起こした。その原因が悪性脳腫瘍によるものと判明し、望みのない長い入院生活が始まった。そういう中で、これまた結婚してまもない幸せの絶頂にあった長女が、胃ガンの手遅れで、余命一年と診断された。昭和五十六年七月六日、長男の実が二十九歳で死去、兄の葬儀に病院から出席した妹の姿は、見るに忍びなかった。昭和六十年の一月七日に、長女芳子も同じく二十九歳の若さでこの世を去った。

全身麻痺の息子が語った最後の言葉は今も鮮明だ。「おやし、俺、車椅子に乗れるくらいにはなるのかなあ。三枝子（妻）の離婚手続きしてくれないかな。そうでないと彼女がかわいそうだよ」若者にとっては、自分の死なんて考えられなかったのだ。看護婦だった娘の方は、我が子ながら天晴れだった。まもない死を自覚して、正月には

皆に「おめでとうございます。ありがとうございます」とお礼を述べ、周りの涙を誘った。残された私たちにとって救いだったのは、二人ともいつまでも嘆き悲しんでいる時間も空間もなかった事と、血は通っていないが、たくさんの日本人、中国人の若者達に囲まれていることだった。今、私の小さな書齋には四つの感謝状が並んでいる。

一つは、「あなたは医学教育のため尊厳なお体の献体を申し出られ、このたび登録されました崇高なるあなたの人類愛の精神をたたえ……平成八年八月二十九日 富山医科薬科大学長 佐々木博」

二つ目は、「あなたは多年、本県体育スポーツの発展に尽力し、その功績顕著と認められるので……平成十二年十二月十八日（財）富山県体育協会長 中沖豊」

三つ目は、「堀口尚先生の日本国富山市と中国汪清県の教育事業関係に対する多大な貢献に感謝

し……二〇〇一年九月十二日 中国吉林省汪清県
政府県長 趙哲学」

四つ目は、「あなたには本学院の創立発展に多大なる御尽力をいただきました……平成十五年三月十五日 富山国際学院 学院長 岸井みつよ」

私は今、社会福祉法人ラッコハウス（重度重複身体障害者授産・養護通所施設）理事長、上海・華東師範大学客員教授。日本中国友好協会理事・富山支部長。富山市スケート連盟理事長など、結構忙しい日々を送らせていただいている。最近、自分は生きてきたのではなく、生かされてきたということを実感できるようになった。

「苦あれば楽あり」お金と栄華には無縁な人生だったが、たくさんのすばらしい人々との出会いが、何にも代え難い財産である。これらの方々に心から感謝し、改めてあの悲惨な戦争を絶対に二度と繰り返さないことを誓い、『平和の礎』への寄稿を紹介してくれた同級生「羅津若草会」代表、福地孝君にお礼を述べて拙文を閉じる。ありがとう

うございしました。